# 大江山

## 要旨

和泉式部が夫に同行して丹後に下っていたとき、娘の小式部内侍が歌合の歌人に選ばれた。そのことで定頼中納言が小式部を、母がいなくて困っているだろうとからかったところ、小式部は見事な歌で応じたので、定頼は返歌もできずに逃げ去った。その後に、小式部の歌人としての評判が高まったのである。

## 構成

| 段落 | ページ・行 | 段意 |
|---|---|---|
| 第一 | 初め〜二五・2〈逃げられけり。〉 | 和泉式部が、丹後に下っていたときに、娘の小式部内侍が歌合の歌人に選ばれた。それを聞いて、定頼中納言が、母上に出した歌の相談への返事は来たかとからかったところ、小式部は、即座に巧みな歌で、母に手紙など出していないと応じた。あまりに見事な応答だったので、定頼は返歌をすることもできずに逃げ去った。 |
| 第二 | 二五・3〈小式部〉〜二五・3〈出できにけり。〉 | これ以後に、小式部の歌人としての名声が高まった。 |
| 第三 | 二五・4〈これは〉〜終わり | 定頼には、小式部がこれほどの歌を即座に詠むとは分からなかったのであろうか。 |

## 品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①和泉式部、保昌が　妻にて、丹後に　下りける　ほど
格助・体修　格助・資格　格助・帰着　ラ四・用　過・体

に、京に　歌合　ありける　に、小式部内侍、歌詠み　に
格助・時間　格助・場所　ラ変・用　過・体　格助・時間　ラ下二・用　接助・単接　格助・資格

とられて　詠みける　を、②定頼中納言、たはぶれて、小
ラ四・未　受・用　接助・単接　マ四・用　過・体　接助・単接

式部内侍　ありける　に、「丹後へ　遣はし　ける　人
ラ変・用　過・体　格助・時間　格助・方向　サ四・用（尊）定頼→小式部　過・体

は　参り　たり　や。いかに　心もとなく　おぼす
係助・区別　ラ四・用（謙）定頼→小式部　完・終　係助・疑問　副　形ク・用　サ四・終（尊）定頼→小式部

らむ。」と　言ひて、局の　前を　過ぎ　られ
現推・体　格助・引用　八四・用　接助・単接　格助・体修　格助・経場　ガ上二・未　尊・用　語り手→定頼

ける　を、③御簾より　半ら　ばかり　出で　て、僅かに　直衣
過・体　接助・単接　格助・起点　副助・程度　ダ下二・用　接助・単接　形動ナリ・用

の　袖を　ひかへ　て、
格助・体修　格助・対象　八下二・用　接助・単接

大江山　いくの　の　道の　遠けれ　ば　まだ　ふみ　も
格助・体修　形ク・已　接助・順理　副　係助・同類

み　ず　天の橋立
マ上一・未　打・終

と　詠みかけ　けり。④思はずに　あさましく　て、「こ　は
格助・引用　カ下二・用　過・終　形動ナリ・用　形シク・用　接助・単接　代　係助・提示

①和泉式部が、藤原保昌の妻として、（夫の任国の）丹後の国に下っていた間に、都で歌合があった（のだが、その）ときに、（和泉式部の娘の）小式部内侍が、（その）歌合の詠み手として選ばれて（歌を）詠んだのだが、②（そのときのこと）定頼中納言が、ふざけて、小式部内侍が（部屋に）いた時に、「（あなたが）丹後（の母上のもと）へおやりになった使いの人は（都へ）帰参しましたか。どんなに（使いの帰りを）待ち遠しくお思いのことでしょう。」と言って、女房たちの部屋の前を通り過ぎなさったが、③（小式部は、入り口の）御簾から半分ほど（体を）出して、ちょっと（定頼中納言の）直衣の袖を押さえて、

大江山…大江山から生野へとたどって行く丹後への道は遠いので、私はまだ天の橋立に足を踏み入れたこともないし、そこにいる母からの文も見ていません。

と（歌を）詠みかけた。④（定頼は即興の歌の見事さに）意外であり、驚い

いかに。　かかる　やう　やは　ある。」　と　ばかり　言ひ　て、　返
副　連　係助・反語(係)　ラ変・体(結)　格助・引用　副助・限定　八四・用　接助・単接
歌　に　も　及ば　ず、　袖　を　引き放ち　て　逃げ　に
格助・対象　係助・同類　バ四・未　打・用　格助・対象　タ四・用　接助・単接　ガ下二・未
られ　けり。
尊・用　語り手→定頼　過・終

⑤小式部、　これ　より、　歌詠み　の　世　に　おぼえ　出でき　に
代　格助・起点　格助・体修　格助・場所　カ変・用　完・用
けり。
過・終

⑥これ　は　うちまかせて　の　理運　の　こと　なれ　ども、　か
代　係助・区別　副　格助・体修　格助・体修　断・已　接助・逆確　代
の　卿　の　心　に　は、　これ　ほど　の　歌、　ただ今　詠み出だす
格助・体修　格助・体修　格助・場所　係助・区別　代　副助・程度　格助・体修　副　サ四・終
べし　と　は、　知ら　れ　ざり　ける　に
推・終　格助・引用　係助・区別　ラ四・未　尊・未　語り手→定頼　打・用　過・体　断・用
や。
係助・疑問

て、「これはどうしたことだ。こんなことがあるものか。」とだけ言って、返歌もできず、袖を振り放してお逃げになった。

⑤小式部は、このことがあってから、歌詠みとしての評判が出てきたのだった。

⑥こうしたことはごく普通で当然のことなのだけれども、あの中納言のお心には、(小式部が)これほどの歌を、即座に詠み出すことができるとは、お分かりではなかったのであろうか。

## 学習活動のポイント

### 導入

**学習活動のポイント**

❶百人一首に「大江山」の歌が採られていることを話題にする。

❷「大江山」を読むに当たり、王朝貴族にとって和歌がどのような意義を持っていたかをとらえる。知技⑵イ

❶便覧や辞書などに百人一首があれば参照する。かるたとして親しまれた歌の背景として、よく知られた話であることを解説する。

❷勅撰和歌集や歌合などについて説明し、日本の古典をよむうえで重要な鍵となる和歌についての興味を促したい。現代の私たちの生活とかけはなれているだけにおもしろく思う生徒も多いはずである。

【評価】古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

### 展開

**学習活動のポイント**

❶「全文を音読する。（「古文を読むために1」を参照する）思判表B⑴ア

❷重要古語の意味・用法を理解する。（「古文を読むために」3を参照する）知技⑴ウ・⑵ウ　→「言葉と表現」1

❸現代語訳する。個々の人物の背景と、おかれている状況を把握する。知技⑴エ　思判表B⑴ア

❹定頼の言葉と小式部の和歌に込められた意味をそれぞれ考える。思判表B⑴イ

❺和歌の中の掛詞を説明する。知技⑴アオ・⑵エ

❻「かかるやうやはある」と定頼が言った理由を考える。思判表B⑴エ

❼作者の考えが書かれている部分を指摘し、内容をまとめる。思判表B⑴オ

❶できるだけ多くの生徒に指名読みをさせる。意味内容をつかんだ音読をできるようにさせる。

【評価】文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについ

て叙述を基に的確に捉えているか、音読によって確認する。

❷古語辞典を引く習慣を身につけさせる。用言の用法について理解させる。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより確認する。

❸会話や動作の主体に注意させる。小式部内侍と母和泉式部について調べ、それぞれの人物の置かれている状況をつかませる。そのうえで、彼らの心情を理解させる。自分が「小式部」「定頼」の立場だったらと想像して、その気持ちを推測させるのもよい。平安文学の理解に必要な「宮中」「後宮」「女房」などの知識を身につけさせる。

【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、ペーパーテストやノート提出などにより確認する。

❹❸の人物の背景と状況を参考にする。特に小式部の母の和泉式部が歌人として高い評価を受けていたことがポイントになる。

【評価】登場人物の置かれた状況について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、ペーパーテストやノート提出などにより確認する。

❺掛詞は、日本語の特色の一つである「同訓異字」であることから、現代でも「しゃれ」として残っていることに気付かせる。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・掛詞などの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解しているか、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

❻❹❺を参考に、定頼の予想がどのように裏切られたのかを考えさせる。

【評価】作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、確認する。

❼最後の部分から、教訓的な話として伝えられたことを読み取らせる。

【評価】作者の考え方について、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めているか、確認する。

## まとめと発展

### 学習活動のポイント

❶「大江山」の和歌に用いられている掛詞についてまとめ、どのような点がすばらしいと考えられるのか、話し合う。 主態

→「言語活動」1

❶ワークシートや振り返りシートを活用し、「大江山」の歌に用いられた掛詞の意味を理解する前と話し合いの後で、「大江山」の歌への理解がどのように深まったか、自己評価する。

【評価】進んで説話のおもしろさを味わい、歴史的仮名遣いの読み方や、活用語の活用形や種類、係り結びなど文語のきまりを理解し、学習課題に沿って、掛詞の表現技法とその効果について理解しようとしているか、分析する。

## 発問例と指導上の注意点

**●二四ページ**

**問**　**名前が出てくる人物について注も参照して説明せよ。**

**答**　和泉式部…歌人。小式部内侍の母。夫の保昌の任地である丹後の国に行っている。
保昌…藤原保昌。和泉式部の夫で丹後の国の国司。
小式部内侍…歌人。和泉式部の娘。歌合の歌人に選ばれた。定頼中納言…藤原定頼。貴族。歌人。

**補**　和泉式部は一条天皇の妃彰子に仕え、歌人として高い評価を得た（「紫式部日記」にも歌才を認めた記述がある）。小式部内侍も共に宮仕えをして、その娘として注目されていたであろう。定頼は「三船の誉れ」（「大鏡」「三船の才」）の藤原公任の子供で、父同様多才な人であった。以上のことも付け加えるとこの人々の背景と状況がよりよく分かると思われる。

**問**　**「和泉式部」（2行目）は、どの部分に、どういう関係で続いているか、説明せよ。**

**答**　「下りける」に、主語・述語の関係で続く。

**問**　**「歌合」（3行目）とは、歌人にとってどのような行事であったか。**

**答**　宮廷貴族社会での晴れの行事であり、その歌ようである。丹後守になったのは寛仁四（一〇二〇）年ごろと考えられている（寛弘七（一〇一〇）年説もある）。

**2保昌が妻にて**　「保昌の妻として」。「にて」は資格を表す格助詞。「…として」。

**2丹後**　丹後の国。現在の京都府の北部。

**3歌合**　平安末期から鎌倉時代にかけて、貴族の間で行われた文学的遊戯。方人（参加する歌人）が左右のグループに分かれ、同じ題で和歌を作り、左右一首ずつ組にして出し合い、講師（読み手）がそれを読み上げて、「勝ち・負け・持（引き分け）」などを判者に判定させ、判定の理由を付けた判詞が付けられる。歌の題は、事前に出される「兼題」とその場で出される「当座」があった。判者は一人が普通だったが、二人の判者による「両判」、左右の人が全員判者となる「衆議判」もあった。歌合で負けるのは不名誉なこととされ、方人は強い競争意識をもって作歌に当たった。

**3小式部内侍**　母の式部にちなんで「小式部」と呼ばれたという。母親と共に上東門院彰子に仕えた。藤原教通に愛され、後藤原公成に愛されてその子を生んで没した。万寿二（一〇二五）年、二十歳代後半の夭逝で

## 語句の研究

**●二四ページ**

**2和泉式部**　大江雅致の娘。初め和泉守橘道貞の妻となり、後の小式部内侍を生んだが、冷泉天皇の皇子為尊親王と恋愛関係となり、親王が若くして亡くなった後、その弟の帥宮敦道親王と恋愛関係を結んだ。この、当時の人々の耳目を集めた恋愛事件のゆえに、道貞とは離婚したと想像されている。帥宮も若死にして、その後、式部は一条天皇の中宮彰子に仕えた。おそらくその縁で、彰子の父藤原道長の家司であった保昌と結婚したのであろうが、保昌の丹後守の任期が終わって間もなく別れたようである。帥宮との恋愛を三人称の歌日記にまとめた「和泉式部日記」（他作説もある）、及び家集「和泉式部集」がある。

**2保昌**　藤原致忠の子。肥前・大和・丹後・摂津の守などを歴任した。「今昔物語集」などにある、怪盗袴垂を畏怖させた話のように武勇の人として有名だが、「後拾遺和歌集」の歌人でもあり、藤原道長の家司としても知られるなど、当時の受領と言われる人々の中でも、声望の高い人物であった

補 人に選ばれるというのは大変な名誉であった。百人一首の「忍ぶれど」（平兼盛）vs「恋すてふ」（壬生忠見）の話なども交えて「歌合」が宮中の一大イベントであり、歌人としての名誉をかけた戦いであったことを知らせたい。この話は、小式部内侍が名誉の歌人の集まりに初めて召された新進であったことが背景になっていることを理解する。

**問 「丹後へ遣はしける人」（6行目）とはどのような人を言うのか。**

答 小式部内侍が丹後の母のもとに送った使者。

**問 「参り」（6～7行目）はどこへ「参り」なのか。**

答 都

**問 「丹後へ…おぼすらん。」（6～7行目）この定頼中納言の言葉を聞いて、小式部内侍はどのように感じたと思われるか、説明せよ。**

答 使いを出したりなどしていないのに、ずいぶん意地の悪い、失礼で我慢のならない侮蔑的なことを言うものだと感じた。

**問 定頼は小式部内侍が詠む歌についてどのように考えていたのか。**

答 歌合に出す歌を作るのを、有名な歌人である母に手伝ってもらうのだろう（または母に歌を作ってもらうのだろう）、と考えていた。

補 「丹後へ遣はしける人」は、小式部内侍が、あった。母の和泉式部は、娘の死を嘆いて「とどめおきてたれを哀れと思ひけむ子はまさるらむ子はまさりけれ（り）」と詠んだ。保昌の丹後守の任期から考えると、この話の当時は二十四～五歳であったかと思われる。

**4歌詠みにとられて**　「とる」は選び出す意。歌合で和歌を詠む歌人として選ばれて。

**5定頼中納言**　四条大納言藤原公任の子で、四条中納言と呼ばれ、詩・歌・管弦・書などに優れ、当代一の才子と言われた父の名を辱めない才を発揮した。「後拾遺和歌集」以下の勅撰集に四十六首入集し、百人一首にとられた「朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木」はよく知られている。また、能書の誉れ高く、今日、大江切れ・烏丸切れ・山城切れと呼ばれる古筆切れは定頼の筆と伝えられている。社交の才があり、大弐三位や相模らとも親しみ、多くの逸話を説話類に残している。また、「今昔物語集」三十五話には、小式部内侍と恋愛関係にあったことを伝える説話があり、そこには誦経の名手であった定頼が描かれている。また、軽率な性格のために後一条天皇から勘当を受けたり、源頼定を嘲って藤原頼通に叱責されるなどの失敗談が多い。寛徳二（一〇四五）年に五十一歳で没しているので、この話の当時は二十七～八歳であったかと思われる。

**5小式部内侍ありけるに**　「小式部内侍が局にいた時に」。この言葉から、これは宮中でのやりとりであることが分かる。

**6丹後へ遣はしける人**　「遣はす」は「行かす」「遣る」などの尊敬語。

**6参りたりや**　「参る」は「高貴な人のもとへ参上する」の意から、「行く」「来」の謙譲語。ここでは小式部内侍への敬意を表す。

**7心もとなくおぼすらむ**　「心もとなし」は、①気がかりだ。待ち遠しい。じれったい。②不安だ。③物足りない。不十分だ。ここでは①。「らむ」は現在推量の助動詞で、小式部内侍の心中を想像している。

**8局**　宮中や上級貴族の屋敷などに仕える女房たちの私室として用いられた部屋。

**8過ぎられけるを**　「られ」は尊敬の助動詞「らる」の連用形。「逃げられけり」（二五・2）の「られ」、「知られざりけるにや」（二五・5）の「れ」も、共に尊敬の用法。

**9直衣**　男性貴族の平服。袍に形の似た、それよりやや短く幅の狭い上着。位階による

母の和泉式部に、歌合に出す歌の指導をしてもらうために「遣はし」た人。母の和泉式部が丹後にいること、母は歌人として名高いこと、小式部内侍が歌合の歌人に選ばれていることから考えさせる。「参りたりや。」とは、小式部内侍が、母の和泉式部に、歌合に出す歌の指導をしてもらうために丹後に「遣はし」た人が小式部内侍のもとへ（母からの返事を持って）帰ってきたか、ということ。「参る」が「あなたのところに参上する」の意の謙譲語であることを調べさせるなどしたうえで、事実関係を考えさせる。「心もとなくおぼす」とは、母からの返事が来るのを待ち遠しく思っているということ。「心もとなし」を古語辞典で調べ、現代語との違いを理解させる。

補 **問** **答** **大江山**（11行目）**の歌にある掛詞は何か。**

「いくの道」の「いく」に「行く」と地名「生野」の「生」が掛けられており、「ふみもみず」の「ふみ」に「踏み」と「文」が掛けられている。掛詞を用いた技巧的な歌を即興で作ったことで、小式部内侍の歌才を見せつけるに十分な歌である。なお、「ふみ（踏み）」と「橋」とが縁語であるとする説もある。

**問** **答** **まだふみもみず**（11行目）**の部分を、修辞技巧に注意して二通りに現代語訳せよ。**

・まだ足を踏み入れたことはありません。

色の制限がないため、好みの色を用いる。烏帽子または冠をつけ、指貫と共に着用した。勅許があれば宮中でも着用でき、名誉なこととされた。

**10袖をひかへて**　「ひか（控）ふ」は、力を加えて動きや変化を押さえておくこと。ここは、「袖をつかまえて相手を引きとどめる」の意。御簾から体を出して定頼の直衣の袖を押さえたというのは、若い女性としてはかなり積極的な行動と見られる。技巧的な歌を作ってみせたという点からも、定頼に見くびられたことで、ここはどうしても自分の歌の才を見せつけて言い返さなければ…という、小式部の気負いが感じられる。

**11大江山**　福知山で山陰道から分かれ、旧官道で与謝峠を越えた右手にある大江山（千丈ヶ岳・八三三メートル）が酒呑童子伝説で名高い大江山なのだが、和歌修辞上の道筋の関係で、京都から亀岡へ抜ける道にある「老ノ坂」のことと考えるべきであろう。

**11天の橋立**　現在の京都府宮津市にある砂州。丹後の名勝地で歌枕。直前の「ふみもみず」に「踏みもみず」と「文も見ず」とを掛け、天の橋立を踏んでみたこともないし、丹後からの手紙も見ていない、と返した。

**●二五ページ**

**1詠みかけけり**　「かく」は、こちらからあるものに対して動作をし向けることを表す補助動詞で、「…しかける、…する」の意。

**1思はずにあさましくて**　「思はずに」は複合語で、「思いがけない、心外だ」の意の形容動詞「思はずなり」。「あさまし」は、事の意外さに驚きあきれる気持ちを表す。本来は、「見下す」の意の動詞「あさむ」の形容詞形だが、よしあしいずれにも用いる。

**2こはいかに**　「こ」は代名詞、「は」は係助詞、「いかに」は副詞。「これは、どうしたことだ」などと訳す。「こ」は、ここでは小式部が見事な歌を詠んで応えたことを指す。

**2返歌にも及ばず**　「及ぶ」は「（ある状態や対象に）到達する」の意で、「…に及ぶ」の形で、「…することが必要である、…することが可能である」の意に用いる。「返歌」については、当時の貴族の社交生活の中で、当意即妙の言葉のやりとり、特に和歌の贈答や唱和が重んじられたことを理解させる。「思はずにあさましくて」という気持が表れた態度である。歌を詠みかけられたら、必ず歌を返すのが、この頃の貴族のたしなみであった。才子の誉れ高い定頼が

ん。・母からの手紙はまだ見ておりません。

**●二五ページ**

**問** **「あさましくて」（1行目）には、定頼のどのような気持ちが現れているか。**

**答** 即座に巧みに歌で応じたことを驚き、あきれる気持ち。

**問** **◉「かかるやう」（1行目）とは、どういうことか。**

**答** 小式部内侍が、母親である和泉式部の助けを借りずに、「大江山…」のような優れた和歌を詠むことができたこと。

**補** 小式部内侍の和歌の才能に驚きながら、「かかるやうやはある」という反語の意味を込めた発言をしていることに注意したい。

**問** **「かかるやうやはある。」（1行目）と言ったのはなぜか。**

**答** 定頼は、小式部内侍が自分一人ではうまい歌を作れないと思っていたから。歌のすばらしさに信じられない気持ち。

**補** 入門期なので、この問い方で難しければ、「かかる」が指示語であること、「や（は）…連体形」の係り結びが、ここでは反語であることをヒントとして示し、まず「かかるやうやはある」を「こんなことがあるものか」と訳す。その後で、「こんなこと」とはこの場合何を指すのかを考えさせれば分かりやすくなる。

**問** **[1] 定頼が「返歌にも及ばず、袖を引き放ちて逃げ」（2行目）た理由を示す部分を本文中から抜き出せ。**

**[2] この部分から、定頼のどのような人柄が分かるか、次の中から最も適切なものを選べ。**

(ア)ユーモラスで、軽率な人物。
(イ)自尊心の高い、繊細優雅な人物。
(ウ)エゴイストで鼻持ちならぬ、非常識な人物。
(エ)羞恥心が異常なほど強いかわり、決断力を欠く人物。

**答** [1]かの卿の心には、これほどの歌、ただ今詠み出だすべしとは、知られざりけるにや。（4行目）

[2](イ)

**問** **「理運のこと」（4行目）とあるが、なぜそう言えるのか、次の中から選びなさい。**

(ア)歌人であるからには自分で詠むのが当然だから。
(イ)修辞法を駆使すれば上手な歌が詠めるのだから。
(ウ)教養として当意即妙に歌を詠むのは当然だから。
(エ)歌合の歌人に選ばれるほど歌が上手なのだから。
(オ)歌人として特に名高い和泉式部の娘なのだから。

---

歌を返せなかったというところに、小式部の歌への驚きとうらたえぶりが表れている。

**3 歌詠みの…** 「歌詠みの」を「世」に続けて、「歌人の世界で」とする解釈と、「歌詠みのおぼえ世に出できにけり。」とあるべきところで、「おぼえ」に続くとする解がある。「古今著聞集」巻五和歌、百八十三話では、「小式部、これより歌よみの世おぼえ出できにけり。」とある。

**4 これはうちまかせて** 「うちまかす」は、①相手の考えにまかせる。一任する。②普通のこととする。ありふれたものとみる。ここは②。「これ」は小式部内侍が見事な応答をしたことをいうとする解に従う。一説に、小式部が母に代作を依頼したと定頼が想像したことを指すとする。

**4 理運のこと** 「理運」は、①物事が道理にかなっていること。合理。②運がよいこと。幸運。③好運にまかせて、気ままに振る舞うこと。ここは①の意。

**4 かの卿** 「か」は代名詞、「の」は助詞。「卿」は上級の貴族。三位および参議以上の公家。また、その人の名の下に付ける尊称。ここでは定頼のことを指す。

**4 これほどの歌** 「ほど」は「程」で、元々

**答** (エ)

**問** **「これほどの歌、ただ今詠み出だすべし」（5〜6行目）という言い方は、小式部内侍の歌のどのような点を評価したものか、次の中から適切なものを二つ選びなさい。**
(ア)非凡な漢詩の教養　(イ)歌道に対する執心
(ウ)当意即妙の機知　(エ)無類の才色兼備ぶり
(オ)洗練された社交感覚

**答** (ウ)・(オ)

**問** **作者の考えが述べられているのはどこか。**

**答** 「これはうちまかせて…知られざりけるにや。」

**補** 出来事が述べられている部分と、作者の感想意見が述べられている部分を分けて、教訓的説話によく見られる型であることを説明する。

**問** **本文には、どのような教訓が込められているか、一五字以内にまとめて示しなさい。**

**答** 人を侮ってはならぬということ。

---

は「程度、頃合い」「身分」「距離」「広さ」「様子」などの意の名詞。鎌倉時代頃から副助詞として用いられるようになった。ここは物事のだいたいの程度を示し、「…ぐらい」の意で、「これぐらいの歌」。

**5詠み出だすべしとは**　この「べし」は推量にも可能にも採れるが、返歌もできずに逃げてしまった定頼中納言の驚きやとまどいをより強く感じられるように、ここは可能でとり、「小式部がこれほどの歌を、即座に詠み出すことができるとは」とした。

**5知られざりけるにや**　「に」は断定の助動詞「なり」の連用形、「や」は疑問の係助詞で、この後に「ありけん」などが省略されている。

## 鑑賞

若い小式部内侍の歌才を見くびって、無用の揶揄を言いかけて恥をかいた定頼中納言の失敗譚ということで、「人倫を侮らざる事」に分類されたものであろう。末尾の「かの卿の心には、これほどの歌、ただ今詠み出だすべしとは、知られざりけるにや。」という編者の評にも、「かの卿の心」の浅さを批判している語気が感じられる。「古今著聞集」第百八十三話では、「小式部、これより歌よみの世おぼえ出でにけり。」で終わっているので、この評言は「十訓抄」の編者のもので、説話から引き出した教戒・徳目によって分類するという編集方針、あるいは関心の持ち方によるコメントである。

しかし、この話を読んで印象に残るのは、そのような教訓よりもむしろ小式部内侍の颯爽とした応対である。彼女の母の和泉式部は、優れた歌人としても、また若い頃からの華麗な恋愛遍歴からも、宮中における有名人であったと考えられるし、共に宮仕えをしていた若い小式部には、いつもその有名人の娘という視線がつきまとっていたであろう。母が再婚した夫と共に丹後へ去った後、その有名人の子が初めて歌合の歌人に選ばれる。あの和泉式部の娘がどのような歌を詠むのだろうかという興味は、だれの胸にもあったはずである。定頼の役回りはもっぱら小式部の引き立て役のようで、いささか気の毒でもあるが、「たはぶれて」とあるように、悪意でからかったのではなく、興味本位の、ほんのいたずら心であったのだろう。一方、小式部も名高い歌人の母を持つプレッシャーは感じていても、それと同時に選ばれる実力も、選ばれたことへの自信もあったと思われる。「御簾より半らばかり出でて、僅かに直衣の袖をひかへて」というしぐさに、晴れの場に初めて臨む小式部の気負いと自負心が表れていると見ることができる。通説によれば、小式部内侍は二十代半ば、定頼は三、四歳年上かと思われる。若き才媛と風流才子との間に起こった話というところに、王朝のみやびが感じられる。

なお、「語句の研究」に示したように、小式部と定頼が恋愛関係にあったという説話があるが、小式部に別の愛人がいたという話の内容からみて、この「大江山」の話よりも後のことではないかと思われる。歌を詠みかけられて逃げ去った定頼が、改めて小式部の才能に魅力を感じたなどと想像するのも楽しいのではないか。